



岩瀬史明
高度救命救急センター統括部長

ター統括部長の岩瀬史明医師は、2度目の激震「本震」（16日）から4日後の20日、県立中央病院の医療救護班の一員として被災地に向かった。

医療最前線 災害に備える

県立中央病院から

〈294〉

観測史上初めて震度7を2
回記録し、熊本、大分両県で
計276人が死亡した201
6年4月の熊本地震。山梨県
立中央病院高度救命救急セン

派遣されたのは岩瀬医師と
看護師、薬剤師、活動を支援
する業務調整員の計5人。空
路と陸路に分かれて移動し、
21日に熊本県庁に到着した。
ただ、「どの地域が一番大

変なのか、県では十分に把握
し切れていなかった」（岩瀬
医師）。地震発生から時間が
経過しても、現地が混乱して
いた様子を振り返る。阿蘇地
域の医療が行き届いていな

なき医師団……。村での医療支
援者（医師や歯科医師、看護
師など含む）は、21日に97人
だったが、28日には228人
と2倍以上に増えたという。
さまざまな派遣先から依頼

被災地の医師は1日2回、チ
ーム代表者を集めた会議を開
き、具体的な活動場所や業務
内容などの取りまとめに奔走
した。「災害時の支援を円滑
に受け入れられるよう、日頃
から体制を作ることが大切だ
と痛感した。どの地域で医療
ニーズが高いか、すぐに判断
できる仕組みも必要だ」。

熊本地震で救護班に参加

医療チーム集中、連携課題

いとの情報があり、南阿蘇
村の支援に当たることにな
る。

を受けた医療関係者は支援を
尽くすが、一斉に集まったこ
とで大きな課題に直面した。

熊本地震では狭い車内で避
難生活を過ごすことで、エコ
ノミークラス症候群を発症す
る危険性が高まっていた。避
難所のグラウンドには車両が
所狭しに並ぶ光景が見られた
という。「プライベートな空
間を確保したいという気持ち
は分かるが、避けないといけ
ない」と強調する。「被災者
の健康に注意を払い、どのよ
うに良好な避難所の環境を作
るのかも考えないといけな
い」

村では多くの医療チームが
活動を始めていた。災害医療
支援チーム（DMAT）のほか、
日本赤十字社、管理栄養
士、心のケアの専門家、国境

岩瀬医師は「チーム同士で十
分に連携できず、引き継ぎ
をしないまま活動場所を離
れてしまうチームもいた。支
援者全体での統率が十分には
取れていなかった」と説明す
る。

被災者からは、複数の医療
関係者から同じ内容の問診を
受けたなどの苦言があった。

山梨県立中央病院の医療救護
班が活動した熊本県南阿蘇村
では、阿蘇大橋が崩れ落ちる
など大きな被害があった（2
016年4月16日）

被災者からは、複数の医療
関係者から同じ内容の問診を
受けたなどの苦言があった。

被災者からは、複数の医療
関係者から同じ内容の問診を
受けたなどの苦言があった。